



TITLE:

巻頭言

AUTHOR(S):

田中, 耕治

---

CITATION:

田中, 耕治. 巻頭言. 教育方法の探究 2010, 13: i-i

ISSUE DATE:

2010-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190370>

RIGHT:

## 巻頭言

今年(2009年)度は、教育学研究科にとって画期となった。そのひとつは、教育学部創設六十周年を迎えたからである。その記念出版を準備する過程で、教育方法学講座の前身にあたる「教育課程講座」「教育指導講座」(いわゆる「Bコース」)の歴史を記した学部四十年誌をまずは紐解くとともに、それからここ二十年間の本講座に関わる様々な研究活動の足跡を確かめることになった。実のところ、いざ調査に乗り出すとゼミナールの内容や非常勤講師のお名前などの基礎データが散逸していることに気づくこともあって、あらためて講座の歴史を後世に伝えるための意識的な努力を行う必要性を肝に銘じた次第である。このようにして出来上がった記念出版誌は、これから講座に入って来る学生諸君や院生諸君には、必読の文献としてぜひ目を通してほしいと思う。大学での研究活動は個々人の努力によって担われているが、それを下支えているのは講座単位やゼミ単位での確かな研究の蓄積であるからである。

もうひとつ今年度に関かった画期も記しておきたい。それは耐震工事のために後期になって引っ越しを余儀なくされ、院生・教員ともども仮の研究室で半年間過ごすことになったことである。予想されたことであるが、後期に集中する卒論や修論の指導においては、時間と場所を設定するだけでも、相当にエネルギーを必要とした。しかも、たとえ指導時間や場所が設定されても、所詮は仮設定であり、慌ただしさを避けることができなかった。コピーを行うこと、郵便物や連絡文書類の入手や提出、各ゼミ生や教員間の連絡や相談、さらには昼食や夕食の場所探しなど、それに伴った苦労話は永く熱く語り継がれることだろう。そのことは、教育学研究科の建物とそのロケーションがどれほどに便宜よかったかを思い知る良い機会でもあった。大学での研究活動は、もちろん大学に限ったことではないが、それを行う時空間を保証する「外的事項」に大きく依存していることをあらためて実感した。耐震工事後の建物は、見違えるほどに奇麗でさらに機能的になった。来年度は、この良くなった「外的事項」を「内的事項」に転化することが求められよう。

2010年3月

教育方法学講座教授

田中 耕治